

「成功する病院情報システム導入マニュアル」

良質の医療を提供するために

国立がんセンター中央病院臨床検査部医長 小山 博史 著

東京大学医学部附属病院中央医療情報部

大 江 和 彦

多くの病院で、病院情報システムの導入が進められている。コンピュータが好きだったというだけで、ある日突然、病院情報システムの導入担当者に命じられ、何をどのように検討すればよいのか試行錯誤を迫られている人が多い。そのような人たちは、数社の大手コンピュータ企業の担当者に話を聞いて、あとは提案をさせればよいと、始めのうちは思っている。しかしそのうち、どうも様子が違うことに気づく。企業の担当者の言うことと院内のいろいろな人の希望することが噛み合わないのである。何がどうなっているのかわからないが、見積もり額は目が飛び出るほど高い。院内の要望もばらばらでわがままでまとめようがない。ストレスばかりの毎日が待ち受けている。そんな途方に暮れる人々のためのすばらしい本が出版された。

著者の小山先生は、国立がんセンター中央病院新棟の病院情報システムをその企画立案段階から担当され、平成10年に先端的な病院情報システムを稼働させた経験をもとに、この本を執筆された。本書は、13章から成るが、技術書によくみ

られるような情報システム技術の一般的なことにはほとんど触れていない。病院情報システムの導入仕様を策定し、どのように院内の各部門の要望をとりまとめ、専門の情報部門のない病院がいかに大きな情報システムを安定して稼働させるか、といった事柄に大部分の頁を割いているのが大きな特徴である。これは、病院情報システムを導入する担当者にとって最も重要なのは、技術知識ではなくて、いかに組織のニーズをまとめバランスのとれた仕様を策定し、それをシステムに反映させるかというシステム組織学とでもいう領域である、という著者の信念の現れであろう。そして、病院情報システムの導入とはまさにそのとおりである。

本書には、一度でも病院情報システム導入に関わった者であれば膝を打つような名言がちりばめられている。“出席していない会議で決まったことに異議をとない”、“院内の意見がコロコロ変わる日和見症候群に注意”等々。システム設計のポイントから院内の意見のまとめ方、リハーサルの仕方から障害対策ま

で、病院情報システム導入に関して必須のステップを幅広く、かつわかりやすく解説した本書は、これから病院情報システムを新規に導入しようとする担当者はもちろんのこと、医療情報を専門に扱う部門の人にもぜひ読んでもらいたい。なぜなら、医療情報を専門に扱う部門の人でさえ、本書に書いてあるような重要な事項を知らず、先端技術の応用にだけ走りすぎてアンバランスなシステム化を企てる人が多いからである。

そして病院情報システム導入を進めている病院では、病院長や事務長などの病院管理者に必ず本書を読んでいただき、本書をテキストにして院内の各部門を集めてレクチャーを開くことを薦める。そうすれば、病院情報システム導入の成功は、単に担当企業や院内担当者だけの能力にかかっているのではなく、病院管理者自身の組織管理能力と病院全体の自主的な組織化力そのものにかかっているのだということを、皆に理解してもらえらるであろう。

● B5 頁136 図11 表54 2000
定価(本体3,000円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)